

つくし(年長)さんと過ごすのもあとわずか。毎年のことながら、子どもたちの成長を喜ぶ気持ちと園を巣立っていく寂しさが混在したなんとも言い難い気持ちです。子どもたちがこれから出ていく社会がより良いものになってほしいと願います。

新型コロナウイルスも終息していないなか、毎日報道されているのでご存じだと思いますが、ロシアとウクライナの戦争が始まってしまいました。私たち大人だけでなく、子どもたちも何かしら敏感に感じ取り、心がざわざわしているようです。

いつになったら人類は争いをやめて、世界中の人々が平和で安心した暮らしをおくることができるようになるのでしょうか・・・。

今回の『ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか。』というのは、石井光太さんという人が書いた本のタイトルです。

2012年にパキスタンで「少女が学校へ行くこと」を禁止した武装グループを批判し、教育を受ける権利を主張し続けた15歳の少女マララ・ユスフザイさんが武装グループに銃で頭を撃たれ、重体となりました。その後、マララさんは奇跡的な回復をとげ、国連で演説を行いました。その演説で語ったマララさんの言葉と、その言葉を聴いた石井さんの思いがつつられている本です。

世界のどこかで、いつも戦争があり、食べるものがない、まずしいくらしをしている人たちはたくさんいる。

日本にも、まずしさはあるし、差別もある。虐待やいじめもある。

それをなくすのは、かんたんなことではない。

戦争はいけない、と言うだけでは戦争は止まらない。

差別はいけない、と叫ぶだけでは差別はなくなる。

しっかりと自分の考えをつくりあげ、それを人にわかってもらえるようなことばにして伝えなければならない。

そのために必要なのが、学校なんじゃないだろうか。

学校へ行って、いろいろな友達と遊び、勉強をし、話し合い、考え合うことで、自分自身のことばを自分でつかみ取っていく。

学校は、そういうことができる場所なんだと思う。

もしかしたら、気持ちをことばにしたって、おとなたちはどうせ聞いてくれない、と思っている人もいるかもしれない。

たしかにこどもの声を聞かないおとなはいる。

しかし、そうでない大人も、たくさんいる。

世のなかには戦争をしていない国もある。

暴力のない家庭もある。

いじめのない学校もある。

それは、だれかが発したことばを、ちゃんと聞いてくれる人がいるということだ。

あなたが自分のことばで、しっかり語れば、きっと多くの人が耳をかたむけてくれるはずだ。

その人たちは、あなたの力になってくれるはずだ。

そういう人が一人また一人とふえていけば、かならず、世のなかは、よいほうへ変わっていく。

(石井光太 『ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか。』 ポプラ社 より一部抜粋)

今年度後半から、つくし(年長児)さんを対象に、「哲学対話」の時間を設けてきました。哲学対話などというと難しく聞こえてしまっていますが、「対話」が楽しめる子どもたちに育ってほしいと思っています。人の話に耳を傾け、自分なりに考えてみる。そして自分の考えを人にわかるように伝えられるようになる。お互いの考え方、感じ方の違いを否定することなく、そういう考え方もあるのかと受け止めていく。結論を出す必要はありません。正解のない問いや気づきを誰かと話しながら、多種多様な価値観や考え方に触れ、自分の視野を広げていく。そしてなにより、「考えることをあきらめない人」、「自分の考えを相手に伝えられる人」に、そして、いずれは「愚かな戦争などしなくても、平和的な解決方法を考えることのできる人」になってほしいものです。